

---

# ルパン三世ＶＳ怪盗レッド

ケロロ軍曹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ルパン三世VS怪盗レッド

### 【ZPDF】

Z0465Z

### 【作者名】

ケロロ軍曹

### 【あらすじ】

どうも。新米だけれど、新米じゃないケロロです。

少年少女物の小説を手にとつてこれはいける!と思い。書いてみました。

ガンマニアなのでガンが登場します。

怪盗レッド。大人や高校生でも面白く読めるのでは非読んでみて下さい。

後、誤字や間違ひ説明が有れば、間違ひをお申し付け下さい!お願いします!

## プロローグ～1（前書き）

どうも。新米だけど、新米じゃないケロロです。  
ダメ文ですが、温かい田で見守つて下さい。

## プロローグ／1

とある博物館。時間は深夜だ。

この博物館にある予告状が届いた。博物館に届く予告状と言えば分かるだろう。

そう。盗みの予告だ。勿論警察は完全なる警備を敷き、万全な装備で迎え撃つだろう。誰もが盗むのは無理。そう思つた。この男以外は・・・。

「えつほ。ほしさ。えつほ。ほいや。」と。何処かに有りがちな声でシャベルをふるつ2人組。

「いやーこんなことしてて本当に着くのか？ルパン。」と黒ずくめの帽子と服を身にまとつた男が言つ。

ルパンと呼ばれた男は「俺の計算に間違いがあつたか？次元よ。」と赤いジャケットと黒いTシャツを翻し言つた。

「いや。間違いは・・・ねエと思つが・・・。随分と遠いところから掘るんだな。」と次元と呼ばれた男が言つた。

「ああ。やつこさんら（警察）も結構な遠いところから警備を敷いてる。だからいつもの通り穴を掘つていくのだ。」

この男たちは一体誰なのか。そう。この男2人組こそ。事件の主要人物のルパン一味の一部なのである。

そして前を通る赤いジャケットに黒いTシャツ。黒いズボン。そしてカンタス・マーラ製の高い（48万）のネクタイをした男こそ我らがルパン三世である。

そして後ろの黒ずくめは、次元大介。ルパンの信用する仲間の一人である。

黒い帽子に黒く長い髭で隠れた目はあまり見えないが、時折驚いたとき等に目を出すのが特徴である。

「ふいー。疲れたあー。うん。確かにこらだと思つんだが・・・。」つんつんと天井をシャベルで突くルパン。

パラパラ・・・という音がし、黒い床が姿を表した。

「おっ・・・。とうとう着いたぜ次元。」とルパン。

「やつとか。いい加減掘りつかれたところなんだ。」と次元。

「待て待てつて・・・。おらつ！」

ガチンという音がして床が壊れた。そして床の穴から美術館内を覗いた。作戦通り。穴から抜けると誰もいなかつた。おかしい。ルパンはそう思つた。父つつあんは外の警備に回つてゐるが、大事な予告した宝物に誰もいないとは不自然だ。まあいいか。そう思い予告していたといふ宝物を見上げた・・・。が。

なかつた。ルパンは我が目を疑つた。無かつたのだ。驚き、辺りを見回した。と2人の警備員が眠らされてゐた。想定外だつた。

「おい次元。」ルパンは俄かに次元を呼んだ。「何だルパン？まさか俺たちの狙つた宝がねエとでも言うのかい？」と面白半分に次元は言つた。

「そのまさかだよ。次元。ねエのぞ。」

「何！？」次元も驚き穴から宝の入つてゐた防弾ガラスケースを覗きこむ。

「どうしたんだよ！ルパン！畜生！何のお宝か教えてくれなかつたんだつてんだから不二子に頼まれたのかとは想像はついていたがな！不二子だぜ！あの野郎！」と吐き捨てる次元。どうやらお宝が何なのがは知らされていなかつたのだろう

しかし、よくも不二子を！とここは猛然と怒りだすルパンだが、何故か一点だけを集中して見ている。

「おい？どうしたんだ？ルパン。」と次元が肩を揺さぶりながら言う。

そしてルパンは次元に一枚の紙切れを渡した。

赤い羽根のような模様の書かれたカードだった。

## プロローグ～1（後書き）

感想、誤字の訂正等、お願ひします！

## プロローグ～2（前書き）

次話投稿です。

「……どうなつてんだ。」

「そう次元は呟いた。

「くそつ。俺達より先に誰かが盗みやがつたのか。しかもこのマークは……。」

次元はルパンを見やつた。

「……最近噂になり始めた怪盗レッドだな？」

とルパンも次元を見やりにやりと微笑を浮かべた。

「嬉しそうだな？ルパン？」

「まあな。」とルパンは笑つた。その次の瞬間にドアが勢い良く開いた。

「ルパン！逮捕だあー！」威勢の良い叫び声を上げながら、大勢の警官とルパンの宿敵、銭形幸一警部が現れた。

「おーや。とつあん。」

「ルパン！今度という今度はもう捕まえてやるぞ！」

と銭形が叫ぶ。

「いやとつあん。今度は俺達は盗んでねえよ！」とルパンが必至の弁解をする。

「嘘をつけ！ちやあーんと盗まれているではないか！」と銭形。

「いや俺達が来る前に盗まれてたんだよ。」とルパンがにやにやしながら叫んだ。

「何？」と言いながら銭形がルパン達に近づいた。そしてルパンの持つていたカードを見た。

「……こいつあ……。もうひとつのお告じやないか！」と銭形が叫んだ。

「へへ？その……怪盗レッドも予告状を出していたのかい？」とルパン。

「ああ。大々的に報道されたよ。」と銭形が叫んだ。

「成程な。俺達は一週間も穴掘り続けてたからなあ。」と次元が納得したように呟いた。

「そんなことよりも！逮捕だあー！」と銭形がいきなり叫んだ。ルパンは、「おいおい待つてくれよ。とつあん。俺達じゃねえつて。」とルパンが手を振りながら行つた。

「はつはつはつはつは！今どうしようとこうしようと関係ないわい！」

「無茶苦茶だなあ。」とルパンが呆れた調子で言つた。

「泥棒に言われたないわい。」と銭形がルパンに手錠を掛けた。と、ルパンの手が外れ、いきなり外れたルパンの手が爆発した。銭形はよろけ、尻もちをついてしまつた。と、博物館の天井が丸く切られた。と、その天井の穴から和服を着た男が飛び降りてきた。そう。その男こそ、ルパン一味の一人。大泥棒。石川五右衛門の子孫であり、愛刀、斬鉄剣を持ち、江戸時代の人物のようない方と身のこなしが特徴だ。「・・・ルパン。助太刀致す。」と言つと、斬鉄剣を振つた。

と、警官達の服や拳銃などが一瞬にしてバラバラに切られてしまつた。まあ、尻もちをついた銭形は助かつたが。

と、天井からヘリのロープが下りてきて、ルパンと次元、五右衛門はそれに捕まつた。銭形もつかもうとしたが、ルパンに蹴り落とされてしまつた。まあ、ズボンを掴み、引きずり降ろそうとしたから当たり前だが。そして銭形が追いかけろと叫び、ルパン達は逃げ去つた。こうして、大事件は幕を閉じた・・・ように見えた。

今日はなんて良い日なんだろう！

ある町の道路を歩いている少女はそう思つた。その少女は、とても健康的で、何ら変わりのない一般的の少女に見えた。怪盗レッドであることを除けば。

この少女は、紅月飛鳥と言う。髪の赤い普通の少女に見えるが、ビルを一十階までロープ無しで登つたりと、考えられない事をやつてのける少女だ。怪盗レッドであれば当たり前か。明るく、元気なのは良いが、多少大雑把だ。

紅月飛鳥。彼は怪盗レッドの実行犯だ。

その隣を歩くのが、紅月圭。アスカの行く先々の美術館や博物館のナビを担当する。IQは200ともはや考えられないレベルであり、アスカの良き相棒である。ナビを担当するときは、性格が一変し、一人称も俺に変わる。いつもは無口で、たまに喋ると、口が悪い。まあ、そんなこんなで、盗み出した品・・・。箱に入つてあり、中身を確認することはなかつた。何故なら、理由は分からぬが、依頼した人物が、持つてくるまで開けないで欲しいと言つたからだ。そう。今2人は、盗み出した品を持つて、依頼者に届けているのだ。依頼者が、本人でなければ信用が出来ないらしい。2人が子どもであることは、事前に知つてている。なんでも、ある会社の社長で、その品は、盗まれたものらしい。・・・届けに行くことを、ケイは嫌がつたが。歩くのが嫌なのか？

それはそうと、ふとアスカが、ケイに向かつて言つた。

「すつじく良い日だよね！新聞には、ルパン三世、怪盗レッドに敗れたり。な、んて書かれちゃつてさあ！」と興奮した調子で喋つてゐる。怪盗として、これ程嬉しい事は無いだろう。何故なら、大先輩である、ルパン三世を出し抜き、それに新聞にまでかでかと載つたのだから。

しかしケイは落ち着いたもので、「まあな。」と言つと読んでいた本に目を移した。

「何よ・・・。自分でつて嬉しいくせに・・・。」と呟いた。聞こえていただろうが、ケイは無視した。

そうしているうちに、その依頼者の会社に着いた。この頃は、大変になることには、想像もしてなかつただろう・・・。

## プロローグ～2（後書き）

感想、誤字等お願いします！

## 第1話～出会い～強襲（前書き）

はい。サブタイトルのサブタイトルは無かつたり一つになつたりします。

## 第1話～出会い～強襲

「・・・はい。」苦労様でした。」

そう言つたのは何処かの会社の社長のような小太りで初老の男だつた。

そう今居るのはレッド2人組に盗みを依頼した男の会社だつた。  
「結構簡単な警備だつたんだ。ルパン三世の警備もプラスされてる  
からどんな警備か心配だつたけど簡単に忍び込めたんだ！」

「・・・調子に乗るな。アスカ。」

ケイが奢める

「何よお・・・」と口を尖らせるアスカ。

「ハツハツハ。兄弟喧嘩はよしたまえ。」と依頼者が言つ。

「あ。申し遅れたね。私、この建設会社の社長を務める広瀬貞治と  
言つものです。どうぞよろしく。」と名刺を渡しながら言つた。  
アスカもケイも、恐る恐る頭を下げ、自己紹介をした。

「それにも宝つてなんなんですか？」とアスカが思い出したよ  
うに聞いた。

「ああ・・・。私達が建設現場で偶然掘り出した物で・・・。」と  
言いながら盗み出した箱を開けた。

「・・・宝の地図さ。」とわざとらしく重々しい声で言つた。中には20センチほどの古い絵が描かれた紙が入つていて。

「へ～これが。」と言いながら近づいて見てみるアスカ。

「それが本物かどうかわからないうがな」とケイが後ろから言つた。

「ハツハツハ。それもあり得るな。まあこれが本物だと信じよう。  
と笑いながら言つた。

「へへ～。それが宝の地図。ねえ～。」という声がドアから聞こえ

てきた。

皆が振り向くとそこにはモンキー顔の赤いロングジャケットを着た男が居た。

ルパン三世である。

「ル、ルパン！」と広瀬が叫ぶ。

「お・・・おい。私のボディーガードはどうした！？」

「御心配なく。ちゃんと眠つてもらつてますよ。」とルパンが微笑を浮かべながら言った。

と、アスカとケイを見て言った。

「ほう。ほう。これは怪盗レッドの2人組野郎も子供を産んでいやがつたのか。いや。「元」怪盗レッドと言つべきか。」と独り言のように呟いた。

「・・・で？用件は何なの？」とアスカが身構えながら強気に言った。

「ふむ。本題に入るか。」と、ルパンが宝の地図を見ながら言った。

「その宝の地図とやらを頂こう！」とルパンが叫んだ。

「・・・へつまりやり返しつて事でしょ？」とアスカがにやりと笑いながら言った。

「・・・大げ無いな。」とケイがにこりともしないで言った。

「つぐるせいッ！とにかく！その地図を頂こう！」とルパンが叫んだ。

次の瞬間。大きな窓に一機のヘリが近づいてきた。何事かと皆が窓を見た。

広瀬が近づくと、そのヘリの中から一人の迷彩服を着込んだ男が現れた。

その男は「S R 25」スナイパーライフルを構え、狙つた。

突然の事で、皆対処が出来なかつたが、ルパンが我に返つたように叫んだ。

「伏せろ！ と。

と、男が「S R 25」を撃ちまくつてきた。一番窓に近かつた広瀬

が撃たれ、倒れた。

ルパンが、アスカとケイを抱き抱え、社長机の中に隠れた。  
「ここに居る。」とルパンがいつもおふざけな顔が消え、一瞬で、  
殺し屋の顔に変っていた。

愛銃「ワルサーP38」を構え、ヘリに向かつて撃つた。一発当たつたようだが、変わらず撃つてきた。

ちらつと広瀬を見ると、呻き声を上げていた。（まあここまで来れば助けてやらなくちゃな。）とルパンは思い、ワルサーを撃ちまくつて気を逸らし、広瀬を引きずり込んだ。

と、パートカーがのサイレンが大量に聞こえてきた。チャンス。ルパンはそう思った。

この建設会社は、大事な会議用とかに臨時で使用する、目立たない支部社だったので、本社と比べれば、一階建てで小さい。そこらにあつた消火器をヘリに投げつけた。

迷彩服の男は、条件反射で消火器に銃弾を撃ち込んだ。と、爆発と白い粉が辺りに撒き散らされた。

男の気が逸れてる間に、ルパンは広瀬を抱きかかえ、アスカとケイに言った。

「俺が飛び降りるところと一緒に飛び降りろ！」

「無茶言わないでよ！」とアスカが抗議する。

「お前なら死なないだろ。」とケイが少量皮肉を込めて言った。

「早くしろ！」とルパンが怒った。

と、ルパンが飛び降り、それに続いて、ケイとアスカが飛び降りた。男は「SR25」を急いで構えて撃つたが、遅かった。もう飛び降りていた・・・。

## 第1話～出会い～強襲（後書き）

ちゅーとはんぱな終わり方ですね！

突つ込まないで下さい！

登場した銃を紹介します。

### 「SR25」

ナイツ・アーマメントのユージン・ストーナーによって開発された、セミオートスナイパーライフル。AR15、M16が元となっている。

AR15、M16とは60%部品を変えており、レシーバー、撃鉄等が、オリジナルのものである。ちなみに、アメリカで運用されているものは、mk11というSR25を基に開発されたスナイパーライフル。しかし本作で使用されるSR25は、独自にカスタム等をされたモデルで、mk11並の性能を持つ。命中率と、信頼性は、非常に高く、7.62mmNATO弾を使用する。装弾数も20発と多い。

### 「ワルサーP38」

ワルサー社が開発した、軍用自動拳銃。

第二次世界大戦では、ナチス軍が正式採用していた。

非常に小型で、高い機動性を誇り、安定性も高く、連射力も高い。しかし、弾詰まりが起きやすく、装弾数も8発。ルパンも使用している為、日本では知名度が高い。

銃紹介は、まだまだ続きます。

誤字訂正、御感想。御待ちしています。

## 第一話～市街地戦（前書き）

街の地図つてこれが子供っぽくてすみません・・・。

## 第一話～市街地戦

運良くパトカーの上に飛び降りれた。ルパンはそう思つた。

「ツ・・・。いてーな畜生。」と、腰を擦る。

ため息をつくと、抱いていた広瀬を傍らに置いた。と、上からアスカとケイが降ってきた。

ルパンの腹の上に見事着地した。ルパンは思わず呻き声を上げた。

「・・・おい・・・降りろ・・・。」

「え？ あつ・・・ああ！」「めん。」

「・・・ごめん。」「つたく・・・。」その時パトカーから聞き覚えのあるでかい声がした。

「ルパーン！ 逮捕するううううう！」

「ゲツ！？とつつかん！？」

なんと銭形が居たのだった。

「はつはつは！ 貴様の居る所この銭形有りだ！。・・・まあ屋台で飯食つてたらいきなり銃声がしたから来ただけなんだが。」

「そんな事よりもとつつかん！ パトカー貸してくれ！」

ルパンが銭形の手を握り、言った。

「ナニ？ おお！ お前も自首する事に決めたか！」

「いやそうじゃなくて・・・。」

「いー やー！ もう自首する事に決めた！」

「とつつかんに決められちゃ困る。」

「ねえ！ そんな事よりもアイツ来るんだけど！－！」

アスカがヘリを指差して言った。先程のスナイパーがこちらを狙つていた。

「・・・という訳なんだ。逮捕でも何でもいいから早くパトカー貸してくれ。」

「よし！逮捕だ！」「……やだねえ……」ルパンは呻いた。スナイパーがこちらを狙い、SR25を撃つてきた。

運転席に座っていた警官は、慌ててパーティを発進させた。銭形と、ルパンが銃で撃ち返した。が、一向に怯む様子も無く、スナイパーは撃つてきた。

「とつあん！高速道路に入つてトンネルに入らう！」

「よし来た！」銭形がルパンの言った事を警官に指示した。

「……巻いたのかなあ？」アスカが心配そうに言った。

「いや。まだ巻いていたないだろ。出口に待ち伏せしているだろ。」と、ケイが冷静に言った。

「まあ、このトンネル長いしな。時間はたっぷりあるし、作戦を練ろうぜ。」とルパンが座席にゆつたりと座り、言った。

「それにしてもルパン。この2人の少年少女は誰だ？」と銭形が聞いた。

「あ！いや……。その……。」とアスカが慌てて何か言おうとしたが、上手い言い訳が出ない。

ケイは、横でため息をついた。まるで「何やつてるんだ。」と言いたげに。

まあ、大怪盗と一緒に居て、軍用スナイパーライフルで狙われていたんだから言い訳のしようもないが。

「まあ。いい。本官が家に送り届けてあげよう。」と銭形が言った。アスカとケイはほつとしたようにため息をついた。

「それにしても。ルパン。お前の盗んだ物とは一体？」と銭形が聞いた。たぶん博物館の連中からも知らされていなかつたんだろう。まあどうの博物館の連中も知つていたかどうか怪しいが。

「宝の地図さ。」とルパンが言った。

「何の？」と銭形がじれつたそうに言った。

アスカもケイも、そういえば広瀬から聞かされていなかつた。広瀬？ そういうふうしたのだろう？

「あの、一緒に居た社長さんみたいな人どうしたんですか？」

「ん？ああ。広瀬氏か。心配無い。ちゃんと救急車で運ばれている。」

「良かつたあ・・・。」とアスカがほつとしたように言った。

「つと続きを話せ。ルパン。」と銭形が思い出したように言った。

「分かつた。・・・とつあんは火星人つて信じるか？」

「火星人がどうかしたのか？」と銭形が聞いた。

「ああ。この。」と、いつの間に取つたのか。例の宝の地図を出した。

「この地図はな。江戸時代前期。その頃はまだ神様や悪魔なんかが信じられていた時期だ。ある日空から釜のようなものが降ってきた。その中から得体の知れない生き物が出てきたんだ。その生き物は怪我をしていて、その怪我を治した医者と仲良くなつた。そしてその生き物は自分は宇宙から来たと話し、火星から来たと話したらしい。そして寿命が来た時。そいつが隠した財産をお前に託す。決して使い道を誤つてはいけないと言つたらしいんだ。しかしその医者は無欲で、藩の藩主に直々に渡したんだ。その医者は村に住んでいるとはいえ、藩主からも絶大な支持を貰つていたからな。しかしその地図の取り合いになり、果ては家臣までが藩主を殺して奪おうとしたんだ。その光景を見た医者は耐え兼ね、地図を奪い、逃げ去つた。そして、医者はもう一度とこのような事にはならないようになると地下に埋めたらしい。その後、将軍に地図を要求されたが、その翌日自害したらしい。その宝は金銀財宝だとか永遠の命だとか世界最高精度の頭脳だとか言われている。そしてその地図を掘りだしたのが広瀬とか言う建設会社の社長さんさ。その社長さんの地図を盗んだのが美術館の連中らしい・・・どうだ？分かつたか？」とルパンが言った。

「・・・はつはつはつは！ルパン！そーんな話がまさかある訳ないだろお！」と銭形が笑い飛ばした。

後部座席に居たアスカも信じられないという顔をしていて、ケイは話も聞かずに何処にあつたのか本を読んでいた。

「そのままかさ。」とルパンは眞面目な顔で答えた。話している途中でトンネルの出口が後600mという看板が出た。ルパンと銭形は警戒態勢に入った。その時ヘリのモーター音が聞こえてきた。なんとヘリがこの狭いトンネルの中に入っていた。しかも車に当たらないように天井ギリギリで。幅は結構広かったので入れたが。

「マジかよ！」とルパンが叫んだ。あのスナイパーが、今度はM249SAWを構えていた。

そのM249SAWを撃ちまくつてきた。しかも軽機関銃だ。拳銃ではもはや勝てない。

「突っ込めえええ！」と銭形がM1911ガバメントを撃ちまくりながら警官に叫んだ。

警官はアクセルを思い切り踏んだ。銃弾がパトカーのボディーを貫通し、穴を開けていった。

ヘリの下をつつきり、トンネルの出口へと出た。アスカは思わず後ろを見た。ヘリの後ろには、この騒ぎを見て、事故った車が大量にあつた。アスカは思わず身震いした。

その後、運悪く渋滞だつた。ヘリはすぐ後ろに居た。M249SAWを撃ちまくつてきている。

どうする？ルパンは考えた。もはやワルサーの弾丸は後一発しかない。とつあんのガバメントも弾切れだ。助けを求めるようにアスカを見た。そして思わずあのカードの模様を思い出した。鳥の羽が描かれたカードだ。・・・鳥？そうだ！電線だ！しかし、一発で当てられるだろうか？あの細い電線を。

その余計な思いを振り切り、ルパンはワルサーを構え、電線を狙つた。M249SAWの弾丸が弾切れになつたのか、弾替えをしていたが、直に終わり、M249SAWを構えた。ニヤリとスナイパーが勝利に満ちた顔を浮かべ、M249SAWを構えた。ルパンは引き金を引き絞り、撃つた。

弾丸は

電線に見事命中し、スナイ

パーがM249SAWを撃つ前に切れた電線が、トンネルの銃撃戦

で喰らつたのか、割れていた防風ガラスの大きな穴に入り、操縦席に居た男に当たつた。

断末魔が聞こえ、閃光が走つた。そして爆音が轟き、ヘリがゆっくりと回転しながら落ちていき、爆発した。

「ふう・・・。」ルパンはため息をついた。今日何度も息をついただろうか。

「すつ・・・い！この距離で電線を当ててしかも倒すなんて！」と無邪氣に言うアスカをルパンは苦笑しながら言った。

「お前が助けてくれたのさ。」

「・・・？」アスカは訳が分からぬといふ顔でルパンを見た。ケイは、無表情な顔で、「ありがとう。」とルパンに言った。「ルパン！忘れていたがこの渋滞が終わつたら貴様を本庁に渡してやる！」と錢形が叫んだ。

が、いつの間にカルパンは消えていた。しかも、傍に居たアスカとケイも一緒に。

「くそおおおお！ルパンめええええ！」と錢形が地団太を踏んで言った。

その頃。ヘリの落ちたところらへんで、男が一人居た。あのスナイパーだった。無線が来たのか、トランシーバーを耳に当てて話した。「……どうだ？ 状況は。」という男の声がトランシーバーから聞こえてきた。

「いや。悪い状況だ。ルパンと怪盗レッドの二人組に逃げられた。しかも地図も一緒にな。」

「そうか。それで被害は？」

「ヘリ一機と、俺以外全滅だ。」

「何だと？」と向こう側の男が驚いたように言った。

「まあいい。さつさと戻つてこい。次の作戦に移る。今度はしきじるなよ。スナイパー・r a b b i t • s h o t君？」

「了解。」とr a b b i t s h o tと言われた男は、何処かへと歩いて行つた。

## 第一話～市街地戦（後書き）

誤字訂正、感想お待ちしています。

銃説明。

M1911A1・コルト・ガバメント

第二次世界大戦中、米軍が正式採用した拳銃。  
ワルサ等が使う9mmパラペラム弾より威力の高い45ACP弾  
を使用する。装弾数は7発。大型拳銃で、反動が強い為、日本人には上手く扱えない。しかし銭形は、特技でもある握力と腕力で、片手で撃つている。9mm弾より人体への殺傷能力は高いが、貫通性能は少ない。

M249SAW

ベルギー製軽機関銃。c-magという下部につけるベルト式マガジンを使用する事もあり、機関部上に200発のベルトリングを込めたされるプラスチック製弾装M27を装着する事が多い。本作では100発のベルト式マガジンを使用している。銃本体の重量を軽くする事により、高い携行弾数を誇る。日本やアメリカでは、分隊単位に支給され、火力支援とされる。冷却は空冷式で、銃身交換も容易。バイボッド一一脚が標準装備されており、簡単に携行ができる。倍率スコープも装着可能。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0465z/>

---

ルパン三世VS怪盗レッド

2011年12月17日22時52分発行